出前講座報告書

福島県県中保健福祉事務所

福島県立医科大学

性差医療センター
災害医療総合学習センター
医学部公衆衛生学講座

1回目 平成27年6月22日　2回目 平成27年7月27日

Vol.3

テーマ

ヘルスリテラシー
～健康情報を使う力、伝える力～

ヘルスリテラシーは、健康に関する情報を住民が入手して、理解し、使おうとする知識と技術だけでなく、保健医療従事者側が伝えるスキルまでをも含みます。この研修では、伝えるスキルに注目しました。

講義の様子

第1回目は、ヘルスリテラシーの概念と重要性に続いて、健康情報のわかりやすさを評価するツールについてでした。課題の文章のわかりやすさを、グループで評価する演習を行いました。第2回目の内容は、健康情報をより分かりやすく改訂するテクニックについてでした。自分たちの職場で実際に使っている健康情報を、より分かりやすくするにはどうすればいいかをグループで話し合いました。

講師紹介

福島県立医科大学
医学部公衆衛生学講座
後藤　あや先生

平成7年山形大学医学部卒業。平成10年米国ハーバード大学公衆衛生大学院修士課程（国際保健学）修了、平成12年山形大学大学院医学研究科博士課程（公衆衛生学）修了後、米国ポピュレション・カウンシルのベトナム支部勤務を経て、平成14年より福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座、現在、准教授。福島県の県民健康調査「妊産婦に関する調査」の副室長兼任、日本公衆衛生学会モニタリング・レポートシステム委員。平成24年から1年間、ハーバード大学公衆衛生大学院武見国際保健プログラム研究員。専門領域は、母子保健、国際保健、疫学、人材育成。

一か月後の振り返り

1か月後アンケート配布は32名、回収は23名でした。74%が「学んだことを保健活動に生かせた」と回答し、また、57%が「健康情報の分かりやすさを評価して、より分かりやすく改訂する自信がついた」と回答しました。注目すべきは、生かせた人の方が、自信がついた方が多いことです(P値=0.05、フィッシャーの直接確率)。

	自信なし	自信あり
生かせなかった (N=6)	5 (83%)	1 (17%)
生かせた(N=17)	5 (29%)	12 (71%)

「以前は、参考資料を用いながら手探りで作成していた面があったが、根拠となる考え方を基に資料を作成するようになったことで、以前より作りやすく感じるようになりました。」

用語の言い換えや時間をとることの難しさはありますが、ヘルスリテラシーの視点をもってツール一つだけでも使うことを心がけてみてください。

アンケート集計結果

1回目の参加者は26名、アンケート回収は26名でした。
2回目の参加者は27名、アンケート回収は27名でした。

評価項目	「そう思う」* 1回目	2回目
研修の資料や進行について		
配布資料は適切だった	92%	96%
時間配分は適切だった	88%	89%
進行は適切だった	92%	93%
研修の内容について		
講義について理解できた	92%	96%
講義は今後の保健活動に役立つと思う	96%	100%
話し合いは今後の保健活動に役立つと思う	92%	100%

*5段階評価：「1．全くそう思わない」～「5．大いにそう思う」の４と５の合計

復習ポイント

・ヘルスリテラシーの意義は？

・健康情報のわかりやすさを評価するツールは？

※帯2が最近使えなくなったので、他のツールを紹介した追加資料を同封しました。

編集後記

この研修では、講義らしい話は20分位だけで、演習が中心でした。ヘルスリテラシーは、ツールの使い方さえ分かれば、後は、職場の仲間と話し合いながら、伝える情報を整理して、伝え方を工夫していくことが大事になってきます。分かりやすい情報をつくるプロセスは、事業目的の確認、チームワークと提供するサービスの向上にまでつながります。（後藤）

出前講座は「福島県保健師現任教育指針」の枠組みで行っています。